

収穫を祝い感謝する季節の訪れ。
盛りの紅葉は、やがて“散紅葉”となり錦の絨毯となる。
初冬から本格的な冬を迎えるまでの微妙な季節の移ろいの頃。
秋の深まりをいつくしみ冬の足音に耳を澄ます—。
陰暦十一月の異称は霜月、雪待月など…。

あはれみえしそでのつゆをばむすびかへて
しもにしみゆく冬がれの野べ

西行 『閑書集』

ふるさとの風 霜月
—甲午の年に

神使いしもの

—神鶏と神馬—

立冬を過ぎると、伊勢神宮も初冬の風情…。
東の空が白み始める頃、鶏の鳴き声が朝の訪れを告げる。
午前八時、神聖な空気に包まれての神馬牽参。
神鶏、—そして神馬。
古来、神使いしもの。

神の使い ～神鶏～

平成二十五年十月二日午後六時、内宮遷御の儀—。
神域の明りはすべてかき消され、浄闇の静寂の中、厳かに斎行された。
午後八時、「カケコー、カケコー、カケコー」
天の岩戸開きの故事にならう、所役による“鶏鳴三声”が太古の森に響き渡る。
つづいて勅使の「出御」の三度の奏上。
やがて神は、秘めやかに新宮に御遷りになられたのである。
鶏鳴三声とは、神職が鶏の声を真似て三度「カケコー」と唱えること。
一方、外宮の遷御の儀では「カケロー」と三回唱えられる。
“かけ”とは、ニワトリの古語で語源はその鳴声による。
神楽歌に「鶏は かけると鳴きぬなり 起きよ起きよ」とあり、
奈良時代には、ニワトリの鳴声を「カケロ」と聞き倣っていたことが理解できる。

神宮の鶏は神鶏とよばれ、神の使いとされる。

日本の歴史の中で、鶏が最初に姿を現すのは、神代の天の岩戸の神話である。

故、是に天照大御神見畏みて、天の石屋戸を開きてきしこもり坐しき。爾に高天原皆暗く、葦原中国悉く闇し。此れに困りて常夜往く。是に方の神の聲は狭蠅なす満ち、万の妖悉に発りき。是を以ちて八百万の神、天の安の河原に神集ひ集ひて、高御産巢日神の子、思金神に思はしめて、常世の長鳴鳥を集めて鳴かしめて、一以下略一

(『日本古典文学全集1 古事記』小学館)

天照大御神が弟の素戔鳴尊の乱行を怒り、天の岩屋に隠れると直ちに世は常闇となり、あらゆる禍いが至るところで起こった。困り果てた八百万の神々が天の安河の川原に集まり協議。その結果、多くの思慮を兼ね備えた思金神の発案によってまず“常世の長鳴鳥”を集めて鳴かせ、その後様々な手段で天照大御神を誘い出し再び明るい世に戻った。

“常世の長鳴鳥”が、まさに太陽を呼び出すものとして立ち現れたのである。

この長鳴鳥について『日本鳥名由来辞典』には、次の様に書かれている。

ながなきどり【ニワトリ】

“にはとり”の異名でもあり、また、“にはとり”の中で鳴声の長い種類をいうこともある。一中略一 常世の長鳴鳥は、常世の国（古代に、遙か遠くにあると考えられていた国）からつれてきた“にはとり”の意である。多くの場合、“ながなきどり”は“にはとり”の異名とされているが、「飼籠鳥」では「唐磨と地鳥の間にて其の声大にして好みて鳴く」とでている。鳴声の長いものとして、現在では東天紅、声良、たうまるが知られているが、これらを特に長鳴鳥という場合もある。

“常世の長鳴鳥”が実在したかは定かでないが、高知県に産する東天紅はその子孫のイメージに最も近い鶏らしいといわれ、一息で十六秒あまりも鳴くといわれる。

東の空が、赤く染まるにつれて、長くその美声を聞かせる東天紅。

名前からもその情景が目浮かぶようである。

また、鶏の鳴き声は時を告げるものとされ、丑の刻（午前二時）に鳴くのを一番鶏、寅の刻（午前四時）に鳴くのを二番鶏と呼ぶ。

神々が太陽の復活を願って鳴かせた“常世の長鳴鳥”

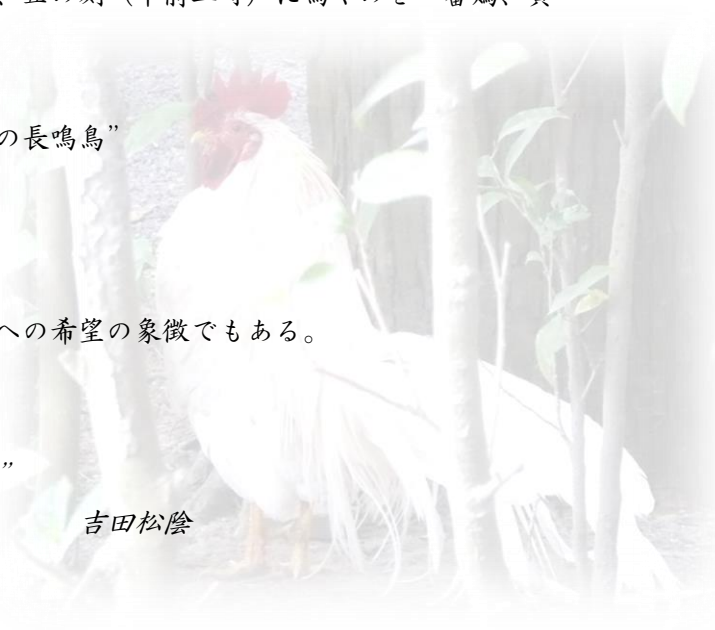
古来、陽光を喜んで声を発した鶏たち。

その謡声は耳に心地よい。

夜明けを告げ光を招く鶏は、輝かしい未来への希望の象徴でもある。

“告げ互るかけの八声に久堅の
天の戸あけて春は来にけり”

吉田松陰



神の乗り物 ～神馬～

神宮の朝は早い。

毎月一、十一、二十一日の朝、神馬は神職に伴われ正宮を参拝する。

神馬牽参である。

色鮮やかな朱色の頭絡と、白く染め抜いた菊花紋の馬衣を付け、正宮に牽参するその姿は気高く愛らしい。

内宮、外宮にはそれぞれ、神馬が二疋飼育されている。

神馬は普段、内宮では神楽殿前の内御厩と参集殿前の外御厩、外宮は北御門口参道西側の御厩において二疋が交代で参拝客を見守る。なお外宮の御厩は神宮工作所にもある。

両宮の御馬休憩所では、丸い運動場を手綱で走らせ、専属の獣医が付き大切に飼育されているので長寿だという。

御馬牽進式は、御馬が“神に仕える馬”神馬になるための儀式である。

御料牧場（栃木県）で育てられ皇室行事や皇族の乗馬で活躍した御馬は、伊勢神宮に牽進され御馬牽進式が斎行された後、神馬となるのである。

現在、内宮では、空勇号（芦毛）と国春号（鹿毛）、外宮は草音号（芦毛）と笑智号（芦毛）が、神馬として神に仕えている。

馬は、古くから神の乗り物として神聖視されており、神は馬に乗って降臨されるものとされてきた。また、古代の祭りや祈願・雨乞いの際には神に馬を奉納する習慣があった。馬や馬形を奉納する歴史は古く、文献には多くの献馬の記述が確認できる。

『常陸国風土記』によれば、献馬の風習は崇神天皇の時代からであると記す。

奈良時代の『続日本紀』には、大宝二年（702）、飛驒国が神馬を献上したことが記されている。また、平安時代の『延喜式』は、臨時祭に降雨祈願には黒毛馬、止雨祈願には白毛の馬が奉献されていた事を記している。

神宮に神馬が進献された史実は、宝亀元年（770）、日蝕に対する儀礼処置として、幣帛を副えて赤毛の馬二疋が供進され、宝亀三年（772）には、暴風雨をしずめる呪術儀礼として毎年九月に馬を奉ったと『続日本紀』は伝える。

また、生馬献上と共に、一方では生馬に代わって土馬・木馬などの馬形を献上する風習も生まれた。そこからさらに馬形をも造り得ないものが馬の絵を献上する事になり、絵馬が誕生したといわれ、現在も絵馬に祈願成就を託し神社に奉納するに至っている。

幻の宮齋宮跡から発掘された土製の馬形“土馬”は、約三十点に及ぶ。これらは、たてがみや鞍などの馬具を簡略に表現しており、平城京や長岡京などの畿内の形式化した裸馬とは少し異なった様相を示す。齋宮跡解明のきっかけとなった代表的な出土遺物“朱彩大型土馬”は日本最大級のもの。奈良時代の祭祀に使用されたとされる。

神宮で神宝として調製される御馬は、延暦二十三年（804）の神宮の諸儀式、祭礼、年中行事を記した『延暦儀式帳』には、「土馬（はにま）」とあり、土製の馬形であったことが理解できる。しかし長暦二年（1038）の第十九回式年遷宮に際して整えられた御装束御神

宝が記されている『^{ちようりやくおくりかんぶ}長曆送官符』には“彫馬”とありこの頃から現在の木彫に変わったことが窺われる。

現在、神宝とされる^{おんえりうま}御彫馬は、白馬や黒葦毛など全六対。
その工程は、まず、日本在来馬の形態の研究から始まり、檜材の木地に彩色が施され細やかな装飾部分が施されていく。その製作には九年の年月を要し、木彫、染色、彫金、漆芸など五十名ほどの人々が携わっているという。

“^{つるぶちげのおんえりうま}鶴斑毛御彫馬”は、正宮に次いで今年（平成二十六年）遷宮が行われた別宮の月讀宮の神宝である。

中世後期に絶え滅んだと推測される白黒斑毛の^{ぶちげ}斑馬は、往時にも貴重な存在で神馬や貴人の乗馬として珍重され絵巻にも描かれている。鶴斑毛の馬が尊ばれるのは、顔に白と黒の鶴斑があり、その文様が^{ずいちょう}瑞兆の印だといわれているからだという。

この鶴斑毛の彩色を檜の木地に施した馬体の背に、平安時代に重要な儀式に列する飾り馬の華麗な^{からくらかいぐ}唐鞍皆具を装備した姿が“鶴斑毛御彫馬”である。

日本を代表する彫刻家平櫛田中氏も第五十九回と第六十回の式年遷宮の際その神宝の調製に携わっている。調製とは、神に奉る御料を規格通りに伝統技法で作りに上げること。神宝御彫馬は、古来受け継いだ仕様を変えることなく多くの名工、名匠の技と祈りを経て神の元に奉献される。

天照す神の御馬のいななける
清き夜明けの杉木立かな

与謝野晶子

神話の時代から豊かな自然の中で息づく動物たちは、人間にとって身近な存在であった。
また、干支に表れる十二支の動物たちとの交流も何百年何千年の長い歴史がある。


悠久の歴史を重ねる伊勢神宮—。

神使いしもの、神鶏が夜明けを告げ、
神馬が佇む聖域は、永遠に続く—。

今年十九年に一度の朔旦の年、太陽が復活する冬至と月が復活する新月が重なる。

朔旦冬至が終わると、やがて初春…、

平成二十七年^{きのとひつじ}乙 羊の年を迎える。



ふるさとの風
神使いしもの ―神鶏と神馬―

参考文献

「日本古典文学大系 29 山家集」 岩波書店 918/ニ/29

「日本古典文学全集 25 神楽歌・催馬楽・梁塵秘抄・閑吟集」 小学館 918/ニ/25

「新日本古典文学大系 12 続日本紀1」 岩波書店 918/シ/12

「新日本古典文学大系 15 続日本紀4」 岩波書店 918/シ/15

「国史大系 18 交替式・弘仁式・延喜式前篇」 吉川弘文館 R210.08/コ/18

「群書類従1 神祇部」 塙保己一／編 続群書類従完成会 081/グ/1

「吉田松陰全集2」 吉田松陰／著 岩波書店 080/18/2

「鶏」(ものと人間の文化史49) 山口健児／著 法政大学出版社 488.4/ヤ

「絵馬」(ものと人間の文化史12) 岩井宏実／著 法政大学出版社 387/イ

「図説日本鳥名由来辞典」 菅原浩・柿沢亮三／編著 柏書房 R488.0/ズ

「鶏 NHK 美の壺」 NHK「美の壺」制作班／編 日本放送出版協会 646.1/ニ

「十二支の動物たち」 五十嵐謙吉／著 八坂書房 480.4/イ

「十二支で語る日本の歴史新考」 東平介／著 明石書店 210.04/ヒ

「御装束神宝 伊勢の神宮」 南里空海／著 世界文化社 L174/ナ

「常若の思想 伊勢神宮と日本人」 河合真如／著 祥伝社 L174/カ

「伊勢神宮 悠久の歴史と祭り」(別冊太陽) 清水潔／監修 平凡社 L174/イ

「定本与謝野晶子全集 3 歌集3」 与謝野晶子／著 講談社 918.6/ヨ/3 (県立図書館蔵)